

石崎光瑤の手記－渡欧後の作品制作と国画創作協会への思いについて－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2022-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松井, 菜摘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0002000067

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



石崎光瑠の手記
―渡欧後の作品制作と国画創作協会への思いについて―

松井 菜摘

【抄録】

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵の石崎光瑠写生帖 141 冊のうち、10 冊には大正 11 年 12 月に日本を発ち、翌 12 年の上半期に旅行したヨーロッパでの写生が遺されている。ヨーロッパでの動向を伝える日記とともに、私信の下書きと思われる手記も見受けられる。官展での経験や国画創作協会への思いがつづられ、光瑠自身の作品制作や発表の姿勢についてうかがい知れる資料として貴重である。

はじめに

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵の石崎光瑠写生帖 141 冊のうち、10 冊には大正 11 年 12 月に日本を発ち、翌 12 年の上半期に旅行したヨーロッパでの写生が遺されている。ヨーロッパでの動向を伝える日記も書かれており、精力的に教会や美術館を訪れ名品を実見し、作品解説を記すなど光瑠の西洋絵画の受容も知ることができる。さらに私信の下書きと思われる手記も遺されており、そこには官展での経験と作品制作や発表の姿勢について、また光瑠と同時期に活躍した土田麦僊、小野竹喬らが結成した国画創作協会への思いがつづられている。本稿では、その手記を書きおこし紹介する。

1. 写生帖「外遊写生：船、花」の手記

本稿で取り上げる写生帖は、当館で「外遊写生：船、花」（収蔵番号 129240609000）と題し収蔵している。以下、そこに遺された手記（図 1～4）の書きおこし文を掲載する。

自分の弱点をすつかり述べて先生と
あなたの判断を待つ事にします
私が帝展の荷の重さと煩雑な
いきさつを思ふと静な固態に転
する事は幸福たと思ひます
併しながら中井様の前例は別としても
あの異才の中へ私が列すると云ふ事は
何人の連中が私を少し買い過ぎ凡
才のかあります 迎えられた時はよいとしても
私は少しく配意を抱く程私の凡才

を知つて居ます
私は帝展に将来厚遇されるとは
思ひませぬ 昨年委員に列しな
かつたと思へはそれは何でも無い事
であります 推薦で既に過分
な優遇を受けて居るのです
私は外国でつく／＼思ひました 年々に
絵を発表すると云ふ事よりもつと
広い
平和に自分の仕事ニ趣味生活に
入りたいと思ひました 帝展は
雑沓してるとは云へ誰れ帰らぬ
散歩場の様なものです いつでも
出品したい時出品する位の考
で眺めたい気で居ました
力強い芸術運動と云ふ事
は立派な事です 実際渴仰しま
すが顧みると私は餘りに私の凡
才を知り過ぎて居ます
大先の国展に入れば本質の上から云つて
絵がよくなると云はれた事は全く
肯定致します 併しそれだけでは
会人の人々に対して少し気の毒に
思ひます
絵の本質をよくするだけならば
他に方法がないとも限りませぬ
私は正直なところ一昨秋の問題
に遇つて放たれた気持ちで将来
を送ろうとしてゐた 途中で
思ひもかけぬ莊嚴な行列に出合つて
同行をすゝめられた様な感か致し
ます それには私の縊縷が氣に
なります
大先と御別れして心の底からしみ
くとうした心持ちが湧いて来ます
私の氣が弱いのに因するのかも知れ

ませぬ 美を定める時才能を危
んだ様に、私は平易な寛猛な
境地に身を置いて自分相応に
仕事をして行く事を好んで来ました
将来に於て尚更是れを欲しま
す
私には国展に迎えられる儘に飛
び込んで行く勇気が欠けて居ま
す そして私は矢張り在来の儘
で帝展で 絵を
発表する事に満足して居
る事が自然の様に思はれて
ありませぬ
此心持ちを吃み別けて下すつて
弱い小供には弱い摂生法を
さづける如く私の才量といふも
の等を標準としてすへて見て
私に正しい判断を下して頂
きたいと存じます 先生に御相給ひ
せる時此趣意を先ず御伝へ
願ひます 私は気の弱い為に
失敗をする例かよくあります
丁度是迄出品の草稿に
就いて御教訓を享つたと全
じく先生の御垂訓を仰きた
いと存じます

2. 手記の本題

この手記に登場する人物や団体を整理したい。「先生」は光瑤が19歳から師事した竹内栖鳳、「あなた」は文脈の中から特定することは難しいが光瑤の本音を客観的に判断できる人物、「中井様」は京都市立絵画専門学校教授で国画創作協会顧問、土田麦僊らとともに渡欧した中井宗太郎であると考えられる。「国展」とは光瑤と同時期に活躍した土田麦僊、村上華岳らが結成した国画創作協会であり、光瑤は「あの異才の中」「力強い芸術運動」「思ひもかけぬ荘厳な行列」と称している。

冒頭で「自分の弱点をすつかり述べて」と手記を始めてるが、光瑤は自分の弱さを明かした上で、何について「先生」と「あなた」の判断を待つことにしたのか。一つには、官展で

の経験とその後の作品制作や発表の姿勢について、もう一つには国画創作協会への思いについてが見いだせる。

3. 官展での経験とその後の作品制作や発表の姿勢

光瑤は大正7年（1918）の第12回文展で《熱国妍春》が特選となり、翌年の第1回帝展で《燦雨》が2度目の特選となった。2度の特選を受けて第2回帝展には《雪》を無鑑査出品し、さらに翌年には帝展推薦となっている。大正11年（1922）第4回帝展では審査委員となり、《白孔雀》を出品した。

だが本手記によれば光瑤は、帝展で評価され、審査委員に抜擢されたものの、「帝展の荷の重さと煩雑ないきさつ」を思っ静観することは幸福だと述べている。光瑤は、将来自分は帝展に厚遇されるとは思えず、昨年審査委員ではなく推薦であったことが自身の帝展での位置づけを物語っているととらえている。その上で、大正5、6年（1916、17）のインド旅行とこのヨーロッパ旅行を経て一つの境地に至った。毎年帝展で作品を発表するのではなく、出したいときに出品するぐらいの心持ちで、平和に自分の制作や趣味に向き合う生活を送りたいというものだ。

2度の特選を経て官展での評価を確立したものの、今後の官展での立場に不確実さを覚え、また官展そのものの信頼性に疑問を抱いていた。官展での動向に惑わされず、自身のペースで作品制作や発表に励みたいというのが、このときの光瑤の心境だった。

4. 国画創作協会への思い

この状況の光瑤に声をかけたのが、国画創作協会の会員たちであった。しかし光瑤は、人並みはずれた才能の画家たちの中に加わるには、自分の凡才を知りすぎていると語った。国画創作協会は立派な「力強い芸術運動」であり、入会すれば絵も良くなると言われたが、上手くなるためなら他にも方法はある、その目的のために入会するのは他の会員に対して気の毒に思うとした。光瑤は、自らにやさしくかつ厳しく制作を行うことを好み、将来もそれを望んだ。その状況で国画創作協会に迎えられるままに飛び込む勇氣はなく、帝展に作品を発表することに満足していると述べた。

光瑤は、自分の画家としての力量は国画創作協会の会員たちには劣るととらえ、新しい芸術に対する熱い志を持った会員たちと肩を並べて活動することに抵抗があった。控えめな光瑤の性格がうかがえるが、自身を過小評価しすぎている印象も否めない。しかし、作品をより良くするためという個人的な都合で会を利用することをよしとしない点は、光瑤の誠実さが表れている。あくまで自分に向き合い、制作に打ち込むことが望みで、その発表の場も国画創作協会ではなく、帝展で申し分なかった。

まとめ

光瑤は、官展での経験から自身の作品制作や発表のあり方について思いを述べ、国画創作

協会の会員たちへの謙遜と敬意を語った。そして弱いこどもに適した摂生を教えるように、私の才量を標準として正しい判断を下してほしいという旨を、「先生」にまず伝えてほしいと「あなた」に頼んだ。しかしここまで思い悩んだ末の光瑤の言葉に、「先生」も「あなた」も異論を挟む余地はなかったように思われる。光瑤が語ったように、国画創作協会へは入会せず、出品したいときに官展で作品を発表する、自身の生活や制作のペースを優先した活動をしたという光瑤の思いを、「先生」も「あなた」も受けとめ尊重したのでろう。光瑤が他の京都の画家たちと歩みをともにせず、時勢やしがらみにとらわれない活動をしたことは、渡邊一美「石崎光瑤 その画業と生涯」（註）でも詳しく指摘されている。本手記は、渡欧後の作品制作や画壇との関わりを語る上で、光瑤の画家としての実直な精神性が見いだせる資料である。

註 渡邊一美「石崎光瑤 その画業と生涯」石川県立美術館編『若冲と光瑤』北國新聞社・石川テレビ放送 令和元年

図1



